

8) PMD患児の障害度と扁平足の関係について

国立療養所再春荘

上野和敏 境 勇 祐
岡元 宏 泉 純 治
今西康二 寺本仁 郎

PMD患児の足の変形については、従来より種々の報告がなされている。足の変形は歩行に際し種々の障害を果たすものである。それに対する調査研究は重要なものと思われる。我々は、PMD患児で歩行平能児を対象に49年から51年まで3年間にわたる調査をおこないました。

方法は、足跡印画法とX線写真による横倉氏の方法によりおこなった。

結果は、横倉氏の方法では、形態的扁平足は14名中8名、即ち57.1%に認められた。この結果を49年度の結果と比較してみると障害度では、49年度ではI-1～I-3までが、51年度ではI-1が少なくなりI-5が多くなっている。

扁平足の出現では、I-2で50%、I-5は100%と、前年度よりも、出現率が高い傾向がみられた。又前回扁平足とされた、患児は今回も全員に認められた。新たに扁平足とされた患児は、障害度の進行が認められた。

本症においては、一般に伸筋群が、屈筋群より比較的障害が、強いと言われている。足関節においては、前脛骨筋の筋力低下のために、尖足と内反すると共に扁平足を、来たすと想定される。

<考 察>

我々の症例では49年度においては扁平足の出現が40%、51年度では57.1%、障害度の進行と共に扁平足の出現率が高くなっている。正常人と比較してみると、患児と同一年台の小学生の扁平足出現は名倉らによると44.5%、中学生においては59%に認められる言われている。つまり全体の頻度としては、正常人との差異は認められないが、筋の萎縮、筋力低下によるものと思われ、PMD患児に認められる足の変形の一つと考える。

9) PMDの歯牙の咬合と咬合圧に関する研究

弘前大学医学部

石川 富士郎* 矢野 文 雄
三 條 勲* 森 山 武 雄**
木 村 恒

*岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

**国立岩木療養所

本邦での本疾患に対する歯学的研究は極めて少なく、長谷川（1976）、浜田ら（1975、1976）の報告をみるにすぎない。私たちは本症患者の咬合機能を解明するための前段階として歯科矯正学的見地から歯列咬合および顎、顔面頭蓋の実態について調査をした。

< 調査対象及び方法 >

国立岩木療養所に入院中のPMD患者について、口腔内診査、口腔内写真の撮影、口腔模型の採得、及び頭部X線規格写真の撮影を行なった。このうち特に *Duchenne* 型男子42名の口腔模型及び、頭部X線規格写真について年令別に各種の分析を試みた。

< 結 果 >

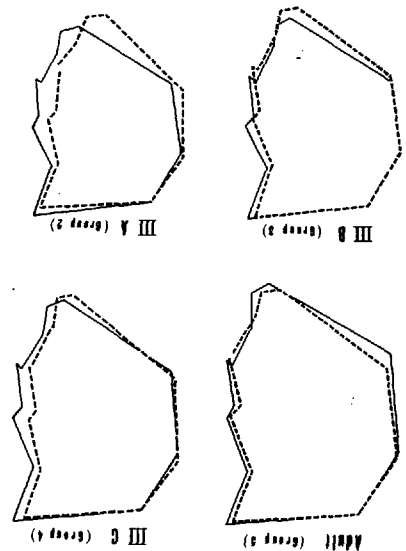
視診の結果から不正咬合の状態は、臼歯部の *cross bite*、前歯部の *open bite* のものが半数以上占めていた。

頭部X線規格写真からみた顎、顔面頭蓋の形態は、角度的計測から下顎角の開大とそれともなう下顎下縁平面の急傾斜があり、下顎オトガイ部の後下方位が強く認められ、開咬の特徴を示していた。また、上顎切歯軸は著しい唇側傾斜を示していた。量的計測からは脳頭蓋底の前方への発育の不足があった。顎顔面全体の前方発育は正常咬合者群と比較してやや劣っていた。一方、顔面の下方発育ではとくに下顔面部で強く現われていたが、

下顎上行枝は短縮傾向が強かった。以上の結果は図1の正常咬合者群との重ね合わせによって示されている。

開咬症を呈していた成人11名について、とくに開咬分析法を行ったが、下顎骨の形態異常によると思われる例が11名中10名にみられ、著しい歯槽部の異常を合併するものは認められなかった。

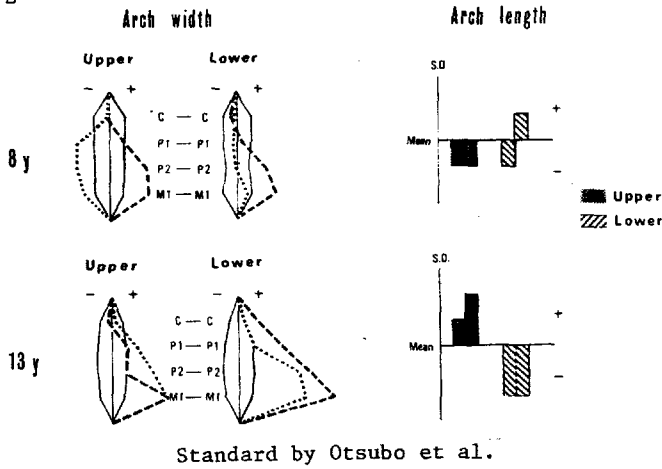
図1



Standard by Sakamoto.

口腔模型の解析は、8才から13才の若年者16名と、成人24名とに分けて行なった。図2は8才男子と13才男子の2例で犬歯から第2大臼歯までのそれぞれの歯列弓巾径は開大傾向を呈していた。13才の例ではこの開大傾向は下顎歯列弓に強く現われていた。成人ではこの傾向がさらに著明であった。一方、歯列弓長径はやや短く、とくに成人の下顎で強くあらわれていた。従って、臼歯部の交叉咬合が示され、先人の調査とこの点は類似していた（図3）

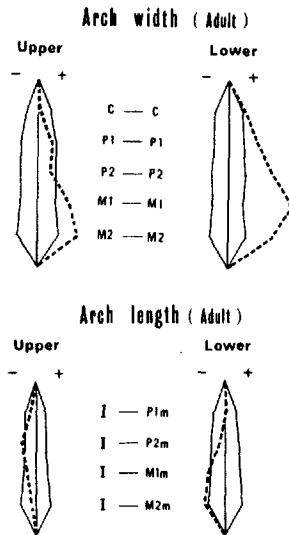
図 2



Standard by Otsubo et al.

本症患者で著明な開咬および交叉咬合については、頭位を保持する諸筋群の筋線維の萎縮によって下顎骨の下方位及び形態異常をおこし、結果として開咬となるのではないかと思われた。また、咀嚼筋と舌の運動機能の異常すなわち舌圧との関係が歯列弓の側方への開大を引きおこしているのではないかと推察された。現在私たちはこの観点から筋電図の採得を行ない、形態異常の成因解明を計っている他、経年的な研究の立場からの追求を行ないつつある。

図 3



Standard by Yamauchi et al.

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

本邦での本疾患に対する歯学的研究は極めて少なく、長谷川(1976)、浜田ら(1975、1976)の報告をみるにすぎない。私たちは本症患者の咬合機能を解明するための前段階として歯科矯正学的見地から歯列咬合および顎、顔面頭蓋の実態について調査をした。